

テーマ別パスファインダー



レポート・論文のための 引用の技術



✦ パスファインダーとは？

Pathfinder（パスファインダー）とは、探検者／草分け／開拓者の意。レポート作成や論文作成で、何をすればいいのか、どこへ行けばいいのかわからない！そんな人のための助けになるように作成した、学問の「道しるべ」です。

作成日：2014年02月07日
大阪大学 外国学図書館 | 箕面キャンパス |
ラーニングcommons るくす | TAチーム

I. イントロダクション

＜ 引用方法 とは？

引用、してますか。レポート、卒業論文、エッセーなど、様々な人々の蓄積された知識を自分の言葉として、援護射撃として、あるいは批評の対象として用いる事、それが引用です。なぜ引用が必要なのかから、引用の形式的な側面まで、このるくぱすで学んでいきましょう。

対象：レポート、卒業論文、エッセー、本を書く[ほか]

※ここで挙げたものは、あくまでも一部の見解にすぎません。形式はもちろんのこと、引用する意義なども、分野や主張する人によって異なる場合があります。

※参考文献の書き方については、るくぱす別冊の【参考文献の書き方】をご覧ください。

II. なんで引用をするの？

大学で行われるレポートや卒業論文は、“学問”の一部です。そして、学問が発展するためには、“新しいこと”が過去のことにつけ加えられる必要があります。

しかし、勉強不足や、情報収集の不足から、引用が正しく行われていない場合、他の人からは「この人は勉強していないな」あるいは「この人はおんなじことを繰り返しているだけだ！」などという評価を受けてしまい、せっかくの努力が無駄になってしまうでしょう。

また、あなたの論文やレポートを読んだ人が「おお、これは面白い！」と思っても、それが誰から触発されたアイデアなのか、あるいは、これから先に進むには何を勉強すればいいのか、分からないこともあります。

“引用”は、レポートや論文が過去の“学問”の成果を受けたものであることを示す手段として、有効なものです。

まとめ：引用をすることによって、①レポートや論文が過去の学問を正当に理解し、②それに対して新しい価値を与えているという証明になる。さらに、③それを読んだ人がさらに学問を進めていくうえでの足掛かりになる。

III. 引用と剽窃

ただし、引用にはいくつかのルールがあります。それを無視してしまうと、「ああ、こいつはルールを無視して人のアイデアを盗んでいる！」といわれ、「剽窃（ひょうせつ）」として扱われてしまいます。

この剽窃は、“絶対にしてはならないこと”のうちの一つです。なぜなら、①先人に対する敬意が見られない、②自分でアイデアが出せない、論ずることができないという能力不足の証明になるからです。

以下では、引用のルールについて、形式を中心に扱います。

IV. 引用形式

参考文献、引用文献については、るくばす別冊の【参考文献の書き方】を参考にしてください。ここでは、本文中に引用する方法を見ていきます。例の文言は、前後に合わせて書き換えてください。実線は例を示すためのものですから、必要ありません。また、分野により異なる場合がありますので、その際は指導教員の指示や、実際の論文、出版物を参考にしてみてください。

1: 文中の引用

1-1: 論文の全体構成などを述べたい場合: XXはYYをした。

例)

金(2012)は、ポライトネス理論の観点から、日本語と韓国語の「ほめ」の表現、対象、返答、談話構造について研究した。

1-2: 内容の一部をそのまま引用したい場合: XXは「YY」と述べている。

例)

その中で、金は、「外見」や「外見の変化」は日本語と韓国語の間にその出現頻度の差がもっとも多かったほめの対象である」と述べている(金 2012, p. 196)。

※この場合、「」内は全て原文のままにする。

2: 長い文章の引用

上下に一行あけ、引用もとは最後に示す。

金(2012)は、以下のように付け加えている。

韓国語では、「外見(の変化)」はもっともほめやすい対象である。しかしながら、それがほめられた場合の「肯定」の割合をみると、日本語よりはかなり高いものの、韓国語の他の対象に比べると若干低く、その代わりに「回避」や「複合」の使用が顕著で、「否定」は非常に少ない。(金 2012, p. 196)

ここで金は、「外見(の変化)」に対する否定が、韓国語ではごく限られたものであることを指摘している。

3: 他言語で書かれた文の引用

2つ方法があります。①翻訳書がある場合は、それを引用する。②翻訳書がない場合は、原点を示し、後に引用者が翻訳を加える。③自分で翻訳したものだけを示す。

外国語による引用が多い論文の場合は、②にすると、見た目が悪くなりますので、①③になりがちです。

また、最初の引用をした段階で「以下、特に断りがない限り、XX語の訳は引用者による」と明記しておく方が良い場合もあります。

①翻訳書がある場合は、それを引用する。

サックスは、カテゴリーについて以下のように述べている。

私たち(=アメリカ人)は雪に対するカテゴリーを一つしかもたないのに、エスキモー(ママ)はそれを十七もの異なったカテゴリーとしてもっているから、エスキモーは私たちよりも雪に関心があるということにはまったくならない。(中略)その文化は世界をあるがままのものとして見るすべての人々に準拠する限りにおいて安定的なのである。(Sacks 1979=1987, p. 38)

この時の参考文献は、以下のようになっています。

Sacks, H. (1979) "Hotrodder : A Revolutionary Category" in G. Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publisher, pp. 23-53 (=1987, 山田富秋[他](編訳)「ホットローダー 革命のカテゴリー」, 『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』, pp. 21-40)

②翻訳書がない場合は、原点を示し、後に引用者が翻訳を加える。

代表作"1984"の中で用いられる英語を簡略化した造語"Newspeak"では、英語における形容詞の造語方法は以下になると、補足のなかで述べられている。

Adjectives were formed by adding the suffix *-ful* to the noun-verb, and adverbs by adding *-wise*. Thus, for example, *speedful* meant "rapid" and *speedwise* meant "quickly."

(形容詞は、名動詞(注:名詞・動詞が同形のもの)に *ful* を、助動詞には *wise* を接尾辞に加えることによって構成される。ゆえに、例えば、*speedful* であれば *rapid* の意味を、*speedwise* であれば、*quickly* の意味を表す。) (Orwell 1949=1950, p. 302, 訳・注は引用者による)

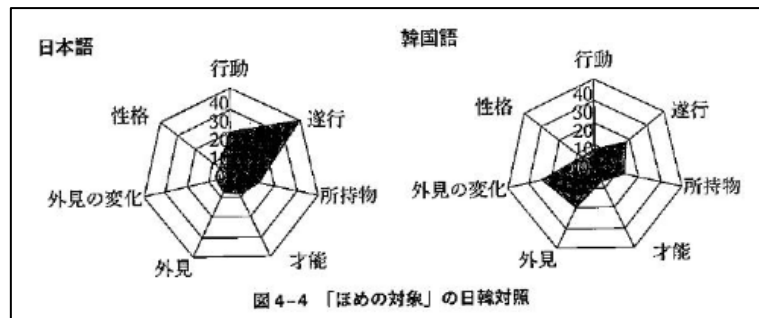
つまり、Newspeak は、画一的な接尾辞によって…

③自分で翻訳したものだけを示す。(特に文中引用の場合は有効)

"1984"のNewspeakでは、「*thought* という単語は存在しない。*think* という言葉により、名詞と動詞両方を兼務」(Orwell 1949=1950, p. 301, 訳は引用者による)となり…

※どれを採用するにしても、原典と翻訳、どちらをも明記しておくことが大切です。

4：図の引用



出典：金(2012) p. 133

のように引用します。なお、図には必ず図表番号が必要となります。
もし、自分で変更を加えた場合は、

金(2012)による図表を一部修正

他の人の図表を参考に作成しなおした場合は、

金(2012)を参考に作成

とすると良いでしょう。

V. Q&A

Q：ページ数がまたがってしまいました。どうしますか。

A：引用などでページ数がまたがった場合は、(pp. 198-199)のように表記します。省略して、(pp. 198-9)とする場合もあります。pp. は、page to page の略です。

Q：先生に違うと言われました。どうしますか。

A：「私も XX の書いた『YY』という本を参考に引用に努めておりますが、今度からご指摘の通りの書式に変更させていただきます」といって、変更する。

Q：孫引きってなんですか？

A：誰かが引用したものを、原典を見ることなく引用すること。引用によって文脈がはぶかれてしまうので、孫引きは危険である。できるだけ原典を当たってみておきたい。

Q：剽窃したらばれますか。

A：ばれます。以下のサイトのように、現在では監視体制が強化されています。
剽窃チェッカー <http://plagiarism.strud.net/> (最終アクセス:2014/02/03)

Q：引用するとき原文が間違っていたらどうしますか。

A：原文の間違いのすぐ後ろに、(ママ)と入れておく。

作例)

遠藤は「るくぱすというパスファインダーは、有用性、実績(ママ)ともすぐれたツールである。」と述べている(遠藤 2012, p. 56)。

Q：古い本なので、いくつも版があります。どうすればいいですか。

A：大切なのは初版と、自分が参考にしたものを併記する事です。また、ページ数などが異なるため、恐らく自分が最も依拠する版のページ数を使用している旨を表記する方が良いと思われます。

例)

Orwell, G. (1949). *NINETY-EIGHTY FOUR*, Harcourt Inc. (本稿のページ数は 1950 年 Signet Classics 版による)

Q&A、ならびに本稿の訂正の指摘を受け付けております。るくす内 TA デスクまでお寄せください。

VI. 参考文献

本るくぱすを書くために使用した参考文献などを紹介します。

<和文>

金庚芬(2012)『日本語と韓国語のほめに関する対照研究』, ひつじ書房

戸田山和久(2012)『論文の教室 レポートから卒論まで』, NHK 出版

林紘一郎・名和小太郎(2009)『引用する極意 引用される極意』, 勁草書房

<英文>

Orwell, G. (1949). *NINETY-EIGHTY FOUR*, Harcourt Inc. (本稿のページ数は 1950 年 Signet Classics 社 第 125 刷による)

Sacks, H. (1979) "Hotrodder : A Revolutionary Category" in G. Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publisher, pp. 23-53 (=1987, 山田富秋[他](編訳)「ホットローダー 革命的カテゴリー」, 『エスノメソドロロジー 社会学的思考の解体』, pp. 21-40)